聖　書：コリント人への手紙第二 5：16〜6：2
説教題：今は恵みの時、今は救いの日
日　時：2024 年 12 月 8 日（朝拝）

パウロは自分の生き方がイエス・キリストの十字架と復活の真の意味を知り、その方と結ばれることによって根本的に変わったということを前回述べました。キリストを自分の個人的な救い主として知るまで彼の生き方は自分中心でした。神の前に罪のある私たちが自分中心に歩むところに真の幸いはありません。そんな彼は罪ある自分のためにキリストが身代わりに死んでくださったことを知りました。そしてこのキリストの十字架上の死はキリストの死のみにとどまるものではありません。キリストを信じ、キリストと結ばれた人もキリストとともに死んだのです。それは古い自分に死んだということです。そしてその人は復活したキリストに結ばれて新しい人として誕生しました。ですからパウロは前の 15 節で、自分はもはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きると述べました。キリストの愛に捕らえられ、駆り立てられて、そのキリストの愛に応えて生きることに人生の目標を定めて歩む人間へと変えられたと。

そのように新しく生まれた者たちは今後、肉に従って人を知ろうとはしないとパウロは今日の 16 節で言います。「肉に従って」とは「生まれながらの価値観で」という意味です。パウロはそのことをピリピ人への手紙 3 章 5〜8 節で証ししています。彼は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身で、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人、その熱心については教会を迫害したほどで、律法による義については非難されるところがない者でした。しかしイエス・キリストを知る者となった時、そのような人間的な誇りはちりあくた、ごみくずのようなものでしかないものとなったと彼は言います。それらはイエス・キリストを知ることの素晴らしさの前では全く重要なものではないと。彼はイエス様のこともかつては肉に従って考えていました。イエス様は田舎の出身で、名家の出でもなく、裕福でもなく、立派な先生についた名門出身の人でもない。突然現れて一時民衆から担ぎ上げられたものの、間もなくユダヤとローマの裁判にかけられ、十字架刑に処された人である。一瞥するにも値しない、どうしようもない呪われた者である。これが肉に従ってこの世の人がする外面的な評価です。しかし今や彼の見方は変わりました。キリストは私の救いのためにその尊いいのちさえも捨ててくださったお方である。私にと

ってかけがえのない愛に満ちたいのちの恩人であると。そして他の人を見る目も変わりました。かつてはどれだけ学歴があるか、社会的地位があるか、業績が何かあるか、どれだけ金持ちか、・・そういう面から人を判断していました。しかしそれらはやがて過ぎ去る一時的なものです。しかし今は、その人は神との関係においてどんな人か、永遠に価値あることに照らしてどのように生きている人かを大事に見る人となったのです。

17 節に、そのように「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」とあります。以前、この御言葉は私にとってあまりしっくり来るものではありませんでした。むしろ戸惑いを覚えるみことばでした。キリストにあって新しい者とされたということまでは受け止められる。でも「古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」と自分を見て言えるだろうか。いや、すべてが新しくはなっていない。まだまだ古い性質が残っていると思ったものです。実はここのギリシャ語の原文に「すべて」という言葉はありません。「新しくなった」と言われているだけです。あるいは欄外に「新しいものが到来しました」という別訳が示されており、こちらの方が良いかと思います。新共同訳や聖書協会共同訳もここを「新しいものが生じた」と訳しています。この「新しいもの」とは何でしょうか。これはイザヤ書に繰り返し出て来る「見よ、わたしは新しいことをする」という主のことばを受けたものです。イザヤ書 43 章 19 節に「見よ、わたしは新しいことを行う」という主の言葉があります。そしてその神の新しいみわざが行き着くゴールとして、新しい天と新しい地のことがイザヤ書でも述べられています。65 章 17 節 :「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。先のことは思い出されず、心に上ることもない。」　この神がなさると約束した新しいものがついに到来した！と今日のⅡコリント 5 章 17 節は言っているわけです。それはイエス・キリストの十字架と復活を通して到来しました。キリストを信じる者は、この神の新しくするみわざにあずかり、新しい被造物とされます。そしてこれはやがての新しい天と新しい地での生活につながって行くものです。確かに私たちはまだまだ不完全で足りないところだらけです。しかし神の約束に従ってついに到来した新しいものにあずかる者たちとされています。そしてやがての新しい天と新しい地に至る者とされました。実際色々と考え方が以前とは変えられました。それに伴ってここでの生き方も変えられています。そのような新しい時代に属する者、キリストにあって新しく造られた者とされました。そのような意味であると知る時、この御言葉を読んで

ただただアーメン！と言わざるを得ません。クリスチャンとは、このような神の新しくする恵みにキリストにあって生かされている者たちなのです。

なぜこのことが私たちの身に生じたのか、その根拠を語るのが 18 節以降です。ここに私たちの新しい誕生は神との和解に基礎を持つことが述べられます。和解とはそれまで当事者の間に敵対関係があったことを前提にしています。つまり神と人との間には敵対関係がありました。もちろん神は悪くありません。人が神に対して罪を犯したことにより、平和の関係は失われてしまいました。通常 A と B の間に問題が生じ、A にその責任や原因がある場合、和解はどちらからなされるべきでしょう。それは A からですね。B は何も悪いことをしていないのですから、A が関係修復のために努めるべきです。しかしここで何と、何も悪くない神の方から和解の取り組みを始められたと記されています。18 節に「これらのことはすべて、神から出ています」とあります。時々イエス様が十字架上で「父よ、彼らをお赦しください」と執り成してくださったから、父なる神は止む無く私たちを赦したかのようなイメージで語られる場合がありますが、そうではありません。キリストを遣わしたのは神です。神が和解の手立てを講じてくださいました。21 節に「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました」とあります。ここでも主語は「神」です。神が行動してくださったのです。神は罪ある私たちをただ赦すことはできません。ご自身の正義を満たす必要があります。そこで私たちをさばく代わりに罪を知らない方、すなわち罪のないイエス様に私たちの罪を負わせて、この方を罪とされました。そして十字架上でさばかれました。そしてイエス様が持っている義を反対に私たちに転嫁して、私たちを義なる者と見なし、受け入れてくださいました。このように神は私たちをご自分と和解させるためにご自身の側でとてつもない犠牲を払ってくださいました。そうして神と私たちの関係を妨げていた罪という障壁を取り除いてくださったのです。

しかしこれだけでは未完成です。この和解が現実に実現されるためにもう二つのプロセスが必要です。それはこの神の和解のわざが広く告知されること、そしてそれを聞く者がこの神の招きを受け入れることです。まず一つ目の和解の告知に関して神が和解の務めをパウロたちに与えたと 18 節にあります。19 節にも「すなわち、神はキリストにあって、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、和解のことばを私たちに委ねられました」とあります。そして 20 節に「こういうわけで、神が私たちを通して勧めておられるのですから、私たちはキリストに代わる使節なので

す」とあります。そこでパウロは言います。「私たちはキリストに代わって願います。神と和解させていただきなさい。」　ここに何と驚くべき神の姿を私たちは見るでしょうか。この和解のためにお願いする立場にあるのは誰でしょうか。それは私たちの方ですね。私たちの方が神に向かって懇願すべき立場にあるはずです。ところが何とここでは神が願っているというのです。キリストがお願いしているというのです。これは何と申し訳ないことでしょうか。神がすべてを用意し、すべての犠牲を払った上で、神がこの和解を受け入れるようにと私たちに願い、働きかけてくださっているというのです。

これを受けて最後に私たちがこれを受け入れるというプロセスが残っています。いくら神の方ですべてを用意くださっても、私たちが応えなければ、この和解を実際に経験することはできません。ここに「神と和解させていただきなさい」とあります。これは原文に忠実に訳そうとしたのでしょうけれども、少し分かりにくい気がします。ここは原文で受身形で書かれています。つまり必要なことはすべて神がしてくださった。私たちがそのために何か働くのではない。私たちはただそれにあずからせていただくだけである。そういうニュアンスを表すために「和解させていただく」と訳したのでしょう。と同時にこれは命令形で書かれていますから、私たちの側にすることがあるということです。それはただ感謝して受け入れることです。神の側で和解に必要なことはすべてしてくださいました。神はキリストにあって罪という障壁を取り除いてあなたと和解してくださった。その和解を受け入れなさい！と言われています。しかも神が使徒たちを通して、そのように願っていると言います。どうしてこのような申し出を私たちは拒否すべきでしょうか。もしこれを退けたら救いはありません。これ以上、神から離れた状態を続けるのはやめて、神がキリストにおいて備えてくださったこの平和の関係に入りなさい。神はあなたと和解しておられるというこのメッセージを信じ、受け入れて、神が備えた祝福と喜びに入りなさいと語りかけられています。

しかしある人は思うかもしれません。これは誰に対する言葉なのか。この手紙はコリント教会に宛てられたものではないか。彼らはクリスチャンであって、すでに神と和解している人たちではないか。なのにこのように語られるとはどういうことかと。結論から言うなら、神の和解を受け入れていると言いながら、その福音を伝えたパウロを彼らが受け入れていないなら、それは何かがおかしいということです。コリント

教会は偽教師たちに影響されてパウロと良好な関係になかったことをこれまでも見て来ました。パウロを疑い、パウロを批判する者たちもいました。そのように彼らが和解の福音を伝えたパウロを、またその福音に生きているパウロを、認めず受け入れないことは、彼らの神との関係に混乱があることを示しているということです。彼らが正しい状態にないことを示唆しているということです。ですからパウロは彼らに「神と和解させていただきなさい」と語るのです。コリント教会には色々な人たちが集っていたでしょう。その中にはこの勧めをそのまま受け入れるべき人たちもいたでしょう。またすでにこの和解を受け取っていると思っている者たちの中にも自分は本当に正しい信仰に立っているのかどうか吟味することが必要な者たちもいたでしょう。パウロは後の 13 章 5 節でこう語ります。「あなたがたは、信仰に生きているかどうか、自分自身を試し、吟味しなさい。それとも、あなたがたは自分自身のことを、自分のうちにイエス・キリストがおられることを、自覚していないのですか。あなたがたが不適格な者なら別ですが。」　神はご自身を大いにへりくだらせ、パウロたちをその道具として用いて、ご自身が備えた和解を受け入れよと懇願しています。その際、パウロは退けて神とだけ和解するというのはおかしいことです。彼らは自分たちは正しい信仰に立っているのか、もう一度良く吟味すべきなのです。

　パウロは続けて 6 章 1 節で「私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みを無駄に受けないようにしてください」と語りかけます。このメッセージを漫然と聞いて、ただ受け流すようであってはならないということです。神の恵みを感謝して受け、神の御心に沿った歩みへと進むべきです。そして 2 節で「神は言われます」と述べてイザヤ書 49 章 8 節を引用します。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」　これはもともとはバビロン捕囚からの解放の恵みを述べた言葉です。しかし神はその出来事が指し示すさらに大きな救いのわざを行ってくださいました。それはキリストの死と復活による罪の捕囚からの解放です。そしてパウロは言います。「見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。」　原文で「見よ」という言葉は二つ目の言葉の前にも入っています。これは明らかにそのように強調していますから、くどくても 2 回入れて訳すべきところです。「見よ、今は恵みの時です。見よ、今は救いの日です」と。パウロはこのように、良く見よ、良く注目せよ！と言っているわけです。今は特別な恵みの時、救いの日であるということを。ですから軽々しく扱ってはならないのです。この恵みに良く目を留めて十分に応答せよ！この神の大いなる恵みに心から応答せよと勧めているのです。

私たちは今日の箇所から神との和解は神から始まったことを改めて覚えさせられます。罪を犯された側の神の方から和解のためのわざを始めてくださいました。またそのために神が測り知れない犠牲を払ってくださいました。その上で神は使徒たちを遣わし、また今日の宣教者たちを通して「神の和解を受け入れなさい」と勧めてくださっています。何ともったいないお願いでしょうか。私たちはこの神のお願いを心から感謝して受け入れ、神との平和の祝福に生きる者とされたいと思います。

そしてもしこれを受けるなら、それは他の人との関係にも現れるべきであることも心に留めたいと思います。ここでは福音を彼らに伝えたパウロたちの受け入れが問題になっていますが、これはもう少し広く主にある兄弟姉妹の交わりにも適用できると思います。コリント教会のある人たちの間にパウロを受け入れていないという問題があったように、私たちも他の主にある兄弟姉妹を受け入れていない、あるいは敵対関係にあるということはないでしょうか。神が私をご自身との和解に導き、また相手の人をもご自身との和解に導いてくださったなら、私とその人との間にも平和が見られて当然ではないでしょうか。さらに神は悪くないのに神の方から手立てを講じ、犠牲を払い、しかもお願いまでしてくださっていることを感謝するなら、私たちもそのように自分の方から始めて、必要なら犠牲を払い、そしてへりくだって相手との和解に努めるべきではないでしょうか。もしそうしようと思っていないなら、それは実は神の和解を本当には感謝して受け取っていないし、またそこに生きてもいないということにならないでしょうか。それは新しく造られた人の歩みから逸脱しており、肉に従って歩んでいることを意味するものになっていないでしょうか。

「神と和解させていただきなさい」という言葉を私たちも自分に当てはめて聞く者でありたいと思います。この恵みをもう一度感謝して受け入れて確かなものとし、キリストにあって今や新しく造られた者として神に喜ばれる歩みをささげ、ともに神をたたえ、神に栄光を帰す者たちへ導かれて行きたいと思います。